

繪本通俗三國志

四編

一



東 京 圖 書 館

和書門

小說類

二六函

架

七八號

七五冊

池田東籬亭校正
葛飾戴斗畫圖

繪本通俗三國志

四編
全十冊

京楓書林

額田篁額堂

岡田羣玉堂

梓

書本三國志序



明治

二年交換

有容持画本三國志者索予序曰前

冊刻成諸名匠既弁卷首是為第

一編予亦序之乎予取而覽之目歎曰

予幼賤為公家給使日被驅逐不餘

讀書寫字嘗聽人相與談通俗三國



亦欲讀之百方苦索僅而見許徒讀
甚快既乃氣豪膽粗謂功名可就古人
可正令殆且二紀汨沒塵泥竟成一俗士
矣再時諸葛何長而劣也男兒遭值
際會則立勲若夷世則當束身脩行
以自表見耳獨掩然自屈甘世擯棄

身亦甚矣然予亦竊怪近日儒林襲
西土策士之習不理章句喜談言今自
以為經世之資矣予觀唐李靖言曰
史官鮮克知兵不能記其實跡是非獨
兵經濟亦復再作史者能著其既成之
跡至揣摩情勢言其知識所能見不

無當否也古之人挾不世之才經營於死
生存之之際焦思極慮而未能悉得其
機會蓋機變百端惟鬼神能究其蘊
故雖在當時日與之接滕自非同揆莫
能測知其情者今乃殊域隔世方擬其
糟粕坐談懸斷人以為得其略胡可

信也方其掀髯攘袂奮筆柏案設
令有姦雄在傍無乃竊笑以為兒戲
乎夫取正史而論之猶且有然况是等
之書增飾附會取足於悅俗士者但其
有忠孝節義及姦邪諂佞之跡之以勸
沮與夫閭巷不正之言壞人心術者其

損益則有間矣如機略之事固無須於
此書無與讀此書人相須然則使予
儕卑劣序之殆為相稱又以戒兒曹讀
之者教無其始也若予之往日其卒也
若予之今日也客笑曰善遂序

○陽明內府公侍臣

天保八年首夏平瀨元壽撰



題龐士元圖



展來驥足雖乘勢無柰鳳
雛難保年水鑑平生縱稱
好鳥知用此不悽然

梭軒居士



損益則有間矣如機略之事固無須於
此書無與讀此書人相須然則使予
儕卑劣序之殆為相稱又以戒兒書讀
之者教無其始也若予之往日其卒也
若予之今日也客笑曰善遂序

○陽明內府公侍臣

天保八年首夏平瀨元諄撰



題龐士元圖



展來驥足雖乘勢無柰鳳
雛難保丰水鑑平生縱稱
好鳥知用此不悽然

梭軒居士



魏博明十圖

魏博明十圖
魏博明十圖
魏博明十圖
魏博明十圖
魏博明十圖
魏博明十圖
魏博明十圖
魏博明十圖
魏博明十圖
魏博明十圖

繪本通俗三國志四篇總目錄

卷之壹

黃蓋獻計破曹操
關澤詐獻降參書
龐統詐獻連環計
曹操橫槊賦詩

卷之二

曹操三江調水軍
七星壇孔明祈風
周瑜赤壁鏖魏兵
曹操敗走華容道

卷之三

関羽義釈曹操

周瑜南郡戦曹仁

孔明一気死周瑜

卷之四

孔明定計畧四郡

趙雲計取桂陽城

黄忠魏延献长沙

孫権大戦合肥城

卷之五

周瑜定計取荆及

玄德入吳取孫夫人

錦囊計趙雲救主

孔明二気死周瑜

卷之六

曹操大宴銅雀臺

孔明三気死周瑜

孔明大哭周瑜

卷之七

来陽縣張飛薦龐統

馬超起兵取潼関

馬超大戦渭水橋

卷之八

許楮赤裸戰馬超

馬超步戰五將

張玄入魏難楊修

卷之九

龐統定計取西蜀

趙雲截江奪幼主

曹操起兵下江東

卷之十

玄德斬楊懷高沛

落鳳坡亂箭射龐統

黃忠魏延大爭功

惣目錄止

繪本通俗三國志四編卷之壹

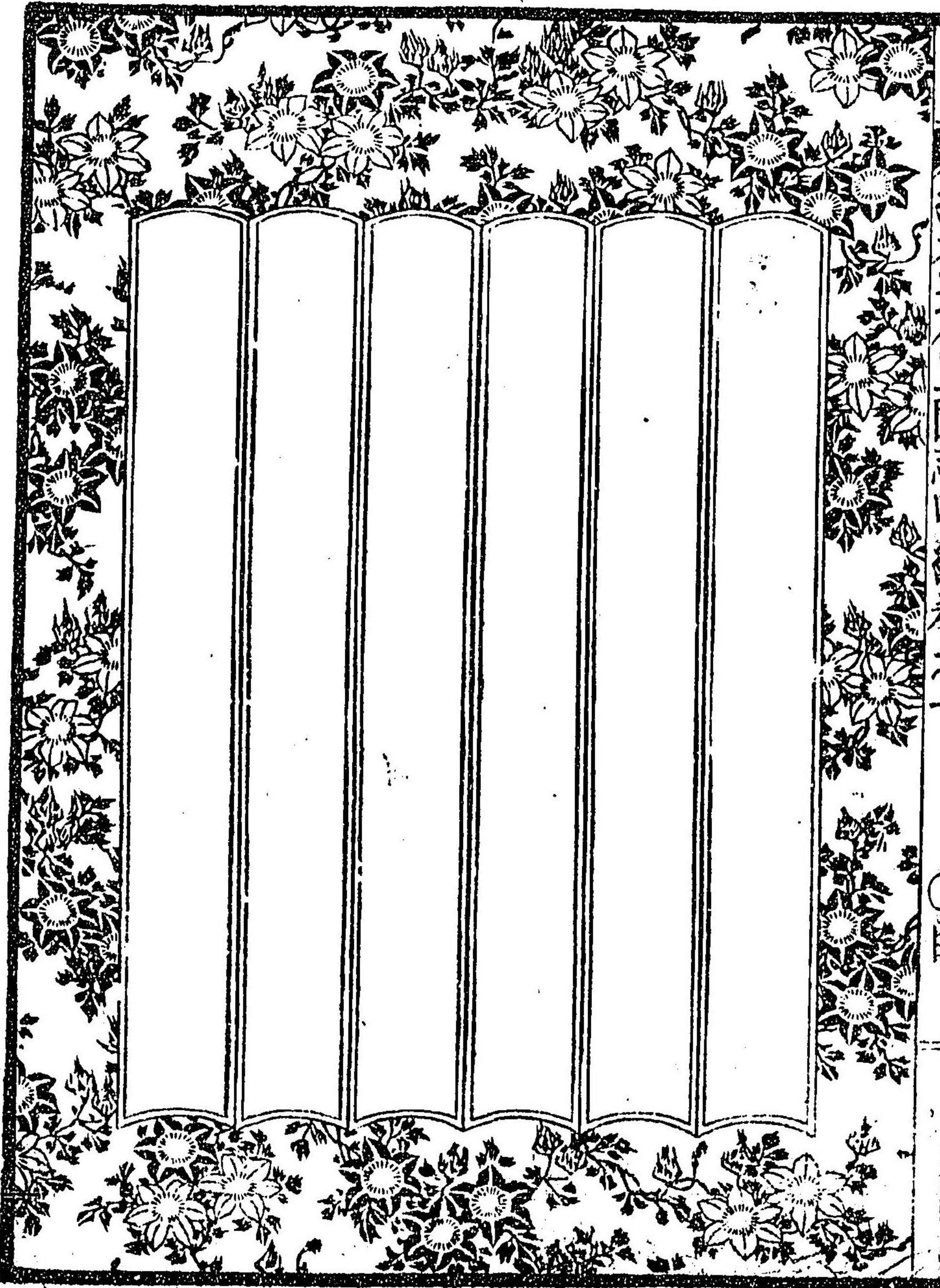
目錄

黃蓋獻計破曹操

關澤詐獻降參書

龐統詐獻連環計

曹操橫槊賦詩



繪本通俗三国志四編卷之壹

黄蓋獻計破曹操

去程小呂軍の十萬余の矢を得て喜ぶ。曹操が方より十五六万の矢を費す。上下氣をとりまゐりて居たり。荀攸が自ら呉に孔明周瑜とて二人の名將よく計をもちひ。さきも大江をへてなす。間者ありて敵のやうきと伺ひてき使もあつ。ゆゑ味方の内より二人をえんて降す。ゆゑひそかに敵の計を通せしめる。呉を破ると掌りの曹操が曰く。さきもさきも合へりし。さきもさきも用ひる。荀攸が曰く。蔡瑁と蔡和を誅せらる。その弟蔡和蔡仲二人の陣中より。丞相と謀りて。二人の心をむく。詭計を呉に降しめらる。さきもさきも疑ひ。曹操がさきもさきも。夜に入りて二人をさきも

弟の計を以て内通
 せよ。一軍ある。思賞せしむ。蔡和蔡仲
 喜んで曰く。丞相御心や安じの。某も妻子と荆及びも置上
 らむ。変ざるのいふ。あつて。際あつて。周瑜孔
 明が首を取るとせう。曹操大よる。酒やも。思賞と
 りて。日兄弟二人。五百人の兵を率へ。順風を帆と
 あげ。呉の国へ行。周瑜の終夜。船を計と思
 按して居たり。忽ち報りて。江北より。數十艘の舟帆を
 火の岸に著。蔡瑁の弟蔡和蔡仲二人。降参はる。呼んで對面す。蔡和
 及び周瑜の内。ひらき。呼んで對面す。蔡和
 蔡仲地を拜哭し。某の兄蔡瑁罪なき。曹操を誅せらる。某二人

あの仇を報ぜん為。江を降参す。疑ひ
 く。一命を以て。曹操を破る。周瑜が曰く。蔡
 瑁の忠臣あり。罪なく。殺さる。汝二人の味方
 来る。疑ひ。國の為。曹操を破の計をせよ。
 金帛や。大将と。甘寧が手下に。二人拜し。思
 謝。中の仕清なり。周瑜の甘寧と。二
 人の降参。曹操が奸計あり。大江を。萬事便を得。れ
 ば。二人の内通。せしむ。計あり。御
 油断。御邊の手下に。二人
 甘寧が曰く。某の計。周瑜が曰く。二人
 探して。某の國を。某の妻子。某の計あり。某

代がもつてこの國の縦横を汝もよそのもよそにみだつて大言を
 出く周瑜いやく立腹し。そや欺きて下知をまはる甘寧を
 出く曰く黄蓋の國の故老の臣あり。爲かかる免し。周瑜
 曰く汝もよそのもよそに無用の舌をうさして。法の度や
 大將地をいぢまひ。黄蓋の罪の深き。よその誅をのぞか
 へ。戦むる前の故老の臣を殺し。味方の爲めあや
 不吉あり。きつてその命を助け軍をく後法を正し。後
 ひる周瑜怒あな休む。諸將ありて再三にまはる周
 瑜曰く。諸將の諫をきく。即時に首を刎て法を正
 さんと軍法を犯す。よそのもよそに差置し。

命をなす。百杖を。諸軍をまらんと。獄卒の命
 諸將又ありて。周瑜大に怒り。前ある案を
 あげのけ。諸大將と追きり。獄卒の命を。黄蓋の衣裳と
 をぎとり。土地より伏せし。伏せ大ある根を。五十杖打せ
 諸大將又きたり。良告を。周瑜座を起すと。挙り黄
 蓋を。汝もよそのもよそに。今五十杖打ぎ。もが
 る。同罪を。打と怒の
 声あや。卒の腹中に入る。諸大將の。黄蓋をな
 け。皮肉を。血の泉の
 抱き。陣中を。絶人の。度
 人涙を。曹肅の。形勢を。與

船中におひて孔明をへり今日周瑜怒りてあへり。大に黄蓋を
 答打の事手におもひて手下に属するものにおもひて諫むる
 事。先生は他国の賓客。平々その座におひてあへり。あま
 りおひたぐ手と袖をく。おもひて見物におひて。眼をまき孔
 明をへりて曰く。御辺におひて。孔明をへりて。曹肅が曰
 く。先生とて。この國をなまかき。来りて。おひて。其の
 る。あへり。い。あへり。孔明をへりて。御辺におひて。兵法を
 鬼神不測の機ある。とて。あへり。周瑜が今日黄蓋とて
 る。あへり。おひて。おひて。計あり。おひて。諫むる。事。
 曹肅が。おひて。初と悟り。大に。馳きたる。体あり。孔明
 が。若肉の計あり。おひて。曹操が。おひて。得入る。事。

詐の黄蓋を降させ。へり。蔡和蔡仲。二人の事。通す。
 ち。あへり。御辺におひて。周瑜におひて。其の。事。
 計を。あへり。又。おひて。曹肅
 へり。周瑜が。傳におひて。今日。黄蓋を責め。問
 へり。周瑜が。外におひて。総將の。沙汰。曹肅が。心中。安が。思
 へり。孔明が。孔明が。都
 督の。情。おひて。孔明が。初と。孔明が。あ
 へり。得たり。曹肅が。おひて。美。周瑜が。今日。あ
 へり。責め。おひて。本。計。あへり。曹肅が。計
 へり。黄蓋を。曹操が。詐の。降。おひて。大。攻。事。
 へり。破。味。方。曹肅が。おひて。曹肅が。の中。

孔明が才香と云ふに感歎しるもいふに色は生れず。退ぞた出まらう。

關澤赤猷降奉書

黄蓋のこゝ周瑜に責む。今陣をなすは入るは難し。唯張の中
よ申さる。諸將うつろく来りと尋ねまじ。た長嘆し居
たり。忽ち赤猷關澤きたり。のりて報じ。黄蓋入
て。將軍の周瑜と曰き。怒めり。黄蓋曰く。恨も
め。味方の内と云ふ。御辺あらざる。が大事と怒む。
關澤曰く。將軍今日責を受す。其苦肉の計。ん
や黄蓋曰く。ん。關澤曰く。周瑜を氣

色と云ふ。其もた九つ推したる。黄蓋曰く。呉の事。
三代の厚恩を受きたる。報せざる。道なき。人の計。
曹操を破らん。わの苦を受くる。あんと。
辭とん。關澤曰く。將軍の。其告め。使
曹操の書と送らな。黄蓋曰く。將軍
の。御辺行の。關澤曰く。大夫の士たる。世
君の事。功業と建の。甲斐は。將軍
の。命と。蟻螻の。微
生で。惜ん。黄蓋大に喜ぶ。床で下り。拜謝し。關澤曰く。
車。引。早く。書簡と。入。漁翁の体。生。
黄蓋の書と。一人小舟に乘。三更の比。曹操が水寨のなりけ



新編通鑑四續卷之

七

まづ番の兵あるを以て問闞澤が曰く汝未だや丞相の報じく
呉の大將闞澤といふ者の一大事ややまらん為に來たりて汝の軍
士をある陣に行ふ趣を告ぐを曹操が曰く敵の計を察して
大勢來るといふありや軍士答へ曰く一人の強弱を以て
別あるべしといふを曹操は亦知れども闞澤は呼
ぶまじしを闞澤は禮して礼するも曹操が曰く汝は呉の臣に
入る泰謀の官なりてきこふがあらん來る闞澤が曰く
人こそ曹丞相の賢を求めんといふある早に雲霓をのぞむ如
くありといふが。今も此の如くも相違せん。黃蓋
は入るべきに告る大事とらんといひて容易に事を行せぬ
といふを曹操は曰く不日と吳を滅ぼさんとわらむ

いふはそら來る。さのゆへ子細を問あり。闞澤が曰く。國の黃
蓋守る公費といふもの三代の呉を任ぐ。故老の
旧臣あり。さういふ周瑜のあやうき常恨で含むる昨
日諸人の前といひ責めし。いへ氣を激しく周瑜やうい
其の曰比兄弟の交も。いふ書簡を送り丞相
に降参せし。いふ根が。幸に黃蓋を
國の兵糧武具を司る期をいふ。盜取し
丞相の用いふ。曹操が曰く。その書簡は何いふの。
闞澤懷中より半紙の曹操案の上より見よ。その書曰く。
東吳糧草官水軍先鋒使黃蓋泣血百拜
謹獻書於大丞相麾下。蓋受孫氏厚恩。昔

為將帥見遇不薄然顧天下事有大勢用
 江東六郡山越之人以當中國百萬之衆
 衆寡不敵海內所共見也東吳將吏無有
 賢愚皆知其不可推周瑜魯肅偏懷淺慧
 意未解耳加之行軍無次自負其能無罪
 受刑有功不賞蓋今應天順命率衆歸降
 瑜所督領自易摧破交鋒之際必為前部
 糧草軍儲隨船獻納因是投書效命在
 乞無疑心伏希聽納建安十二年冬十一
 月日黃蓋泣血百拜奉書

曹操案の上のいふ十返のうり讀むる。勿忘案をたれと打目

とすゆて大に怒り黄蓋のま苦肉の計をもち。汝を詐り降
 る書簡を持せ中々計をもちひん。いづる我々のい
 得んひき生くと斬とまくといひ。武士ももる。素
 のひき生くとまると。關澤色々の変せ。天のいひて大
 笑。曹操ひき戻させ。まもる。汝が計を破り。い
 首を刎とまるといふ。いひて。問ひ。關澤が
 曰く。いひて。汝が笑のうら。黄蓋が人々を。曹
 操が曰く。人々を。關澤が曰く。汝殺さ
 せ。殺せ。あんと。尋ね問ふ。曹操が曰く。勿
 兵書と読む。あんと。計を。汝別
 のぞむ。得ん。我々の。關澤が曰く。汝

とりて呉て破るの手の内あり他日あるも思賞ありん
 ひらび闕澤が曰其は恩賞の心と降るもあつた夫
 應入順ひあつ曹探の内きつ酒宴ありて
 ちあつりつとたきつあつて人きたり曹探が耳をひき
 かん低きく曹探問て曰書簡ありその人書簡とわかれ
 き曹探ひかたえと喜びの色顔あつる闕澤の内は是
 きたちと蔡和蔡仲が方より黄蓋が責らまゝのり内通
 あつてとち居るまゝのり曹探が曰なつて御辺
 たび呉の回り黄蓋と計をいせ曰限定する内通は
 ち兵をまゝとて闕澤が曰其はなつて来り
 ちとちとち呉の回り丞相の別を宜き人を用え

曹探が曰も一人他人のちも事あるも洩さる闕澤再三
 ちの内たる疑つてとて指さるるも其は
 呉の行も又たるく回来しといひ曹探大に喜び金銀をのこ
 へ闕澤の内も受む又小舟に乗る呉の回り黄蓋のあ
 右の趣とつびつる熱のりも黄蓋喜んで曰も御辺
 使とせまゝのり苦く受たるの徒事とあつ闕澤が曰も
 ち曹探があつあつてた蔡和蔡仲が方より内通の書簡
 ちのり曹探その書簡とていひていひて信
 ちの甘寧が陣を行つその様子と伺ひ黄蓋が
 同くも闕澤直甘寧が陣を行甘寧問て曰御辺
 ちの来りもも闕澤が合て日本陣とていひていひて

四人同坐一酒と飲むるに中の事と相議するに蔡和
蔡仲いづれかの夢を告げしを即時に書簡とて曹操に
報ふるに關澤に別書簡とて甘寧の呉を討つ
ては丞相降さんとも黄蓋が兵糧を盗んべ来しと
其あつたは日限の定めたるに青龍の牙
旗とてさへせんがる舟とてあつたは黄蓋が降参の
案の中疑ふるに書と書と曹操が方へ送るに曹操は
呉の大將甘寧も周瑜も辱しめらるる降参と後
蓋は五十杖の責を受けしに關澤と使として内進
るに又書簡と送るに疑ふる

是う江で渡りて呉へ行きの虚実とらうるに
蓋は軍法とて一命とせしむるに曹操喜んを許し
又呉の困へん

龐統献連環計

このとき周瑜の中軍を率へて計を議するに龐統は
たの曹操と破るに大攻とせしむるに周瑜
が白くは計を定めたるに龐統が白くは
江の上あつたは二艘の舟とて火を自餘の舟とて
ん

方々番で付たりしを、蔣幹をまゝくと、菴の内よりの、中夏に悶へて寝食をせしむる。ある夜星の光天に満ち露を露にひるありしを、蔣幹と出く。辺で逍遙する。是は讀書の声なき人なる。蔣幹の内よりの、一に、中、學問する人ありしを、不測と定まらせと尋ね、山際の溪陰に柴の扉を掩たる屋四五軒あり、灯火をのたま挑たるあり。蔣幹ひそるる。二人、劍をたらし、孫子が兵書と讀書を讀居たり。蔣幹まじり、世々、異人ありしを、蔣幹とたひて、案内し、人起と出む。蔣幹問て曰く、山中、書を讀ゆ。ある人ぞ答へ曰く、此の龐統字は士元といふ。あり。蔣幹曰く、鳳雛先。

答て曰く、士元あり。蔣幹曰く、ある人の深山に居りて、龐統が曰く、周瑜の、才智の、忠臣の、謙、徳ある人、如、書、の、人、の、徳、御、辺、の、人、ぞ、蔣、幹、が、曰く、蔣、幹、字、の、子、翼、之、先、日、群、英、の、會、の、對、面、せ、し、む、人、の、龐、統、打、駭、ひ、て、曰く、龐、統、の、御、入、り、の、御、入、り、の、御、草、菴、を、入、り、し、底、の、蔣、幹、が、曰く、御、邊、の、才、智、の、人、の、蔣、幹、が、曰く、蔣、幹、が、曰く、去、る、曹、操、の、事、の、其、行、ん、龐、統、の、氣、付、る、曹、丞、相、の、用、い、の、蔣、幹、が、曰く、蔣、幹、が、曰く、其、の、命、を、入、り、

欠

MISSING

船中にてのり安穩なる曹操大喜び席を下りて謝し
 曰く先生の良謀ゆゑ安んぞ呉を破るのを得ん
 龐統が曰く某が浅見丞相よく裁判し曹操即時下知
 傳へ中軍の鍛冶とありて夜々日々鏃を大釘鎖を作らせけ
 る其の文明ある君の遇誠と尽く忠を致さざらんか
 吳の諸將も周瑜と死んで友忠のふの某三すの言
 動一丞相の為とあると説が尽く来降ん志ると死に不日
 周瑜を生取く玄德と平ぐ曹操が曰く先生よとこの
 めがふたたび呉と向く同志の人と結ぶひも他日功とある

二封をへ一龐統が曰く某富貴の為とあるゆゑたが氏乃
 苦とせん為あり丞相の吳を討入るゆゑとある人
 殺しぬとある曹操が曰く天を替ひて道を行ひ四海の民
 と清んとも安んぞ安ん人々害と念き龐統再拜し曰く某
 いま江南より丞相の攻入るの大軍をばちちの人を殺
 さん孫がくちる駿の札をたきつて某が一族を安んぞ曹
 操が曰く先生の一族いぬとある龐統が曰くもぐく江南の岸
 の辺のりも勢を下りたる兵の狼藉を免まらん曹操す
 るも當手の軍勢吳の國に入と龐統が一家を盤好とある
 ちと書くわたりも龐統持しと思と謝し丞相とある
 早く推寄りもあらず周郎も惜られぬとある

て身で脱るの計を眼前に子殺わりの計あり。其の難を
 徐康再三問ふ。龐統耳を付て計を私決し。其
 徐康地上を拜し。平生玄徳を慕ひ。伏龍鳳雛其才
 天下の高一とせし。今果して右の計に幸ふ。活命の恩を受
 り。夜に入て身近に計を告ぐ。諸所を以て西涼の馬
 超韓遂大軍を起して謀又虚の計を都を攻るといふ
 せらば。はむの日の沙汰陣中の充滿。五人三人頭を
 へて私決を告ぐ。物さぐらふ。今まの曹操は
 告ぐ曰く。今何れも西涼の馬超韓遂を起し。韓遂とて大
 軍を率して都を攻ると。沙汰は味方の軍勢にお

妻子と都を残りて。人の外に曹操の驍
 ろた諸大將を以て。兵を起して都を攻るといふ
 馬超が都を襲ふの計を思ひ。其の内に
 時に守陣中の難を。曹操は用ひて。叶
 ぬ。なまの代に都を行くと。徐康も生じて曰
 某久く御恩を受て。一の功にあさむ。三千余
 騎を率して。都の上り散関を截塞して。要害に敵を支
 急にあつて。報せし。曹操喜んで。徐康を行
 る。其の計を告ぐ。散関の上の兵を残り。其の
 其の計を領して。即時に三千余騎の精兵を以て。徐康
 と先手として。打ち立て。徐康命を受て。都を

と馳登る。さきとあつち麻統が徐度の教へ討あり。

曹孫横朝賦詩

徐度命と受と。さきとあつち麻統が徐度の教へ討あり。今都の内
の掛とあつち。さきとあつち麻統が徐度の教へ討あり。今都の内
巡り。そのうち大船一艘が中央より。帥の字書六。旗を立
せ。左右も水寨も傍へ。弩千張や伏置。さきとあつち麻統が徐度の教へ討あり。今都の内
も。と。建安十二年冬十月十五日あり。さきとあつち麻統が徐度の教へ討あり。今都の内
く晴く風静。浪平。あつち麻統が徐度の教へ討あり。今都の内
て。ゆめ。さきとあつち麻統が徐度の教へ討あり。今都の内
登く。その光白目のとく。一帯の長江。素練。さきとあつち麻統が徐度の教へ討あり。今都の内
孫が近侍の輩。さきとあつち麻統が徐度の教へ討あり。今都の内

數百人排列。文武の大將階級。依りて。さきとあつち麻統が徐度の教へ討あり。今都の内
曹孫の内勇。喜び。四方の景。さきとあつち麻統が徐度の教へ討あり。今都の内
たる南屏山。月映。さきとあつち麻統が徐度の教へ討あり。今都の内
口の江。極々南。樊山。北。烏林。四遠の風景。さきとあつち麻統が徐度の教へ討あり。今都の内
さきとあつち麻統が徐度の教へ討あり。今都の内
起さきとあつち麻統が徐度の教へ討あり。今都の内
大半。さきとあつち麻統が徐度の教へ討あり。今都の内
南富饒の国。さきとあつち麻統が徐度の教へ討あり。今都の内
手下。さきとあつち麻統が徐度の教へ討あり。今都の内
さきとあつち麻統が徐度の教へ討あり。今都の内
諸將。さきとあつち麻統が徐度の教へ討あり。今都の内

尺一之樂々横へ諸將の心...
 黄巾の賊を破り呂布を擒よ...
 深く塞北へ入る遼東を定め天下の内を縦横する...
 大夫の志あり況や...の景を對し...
 對酒當歌
 去日無多
 何以解憂
 悠悠我心
 我有嘉賓
 何時可輟
 人生幾何
 當以懷
 惟有三杜康
 呦呦鹿鳴
 鼓瑟吹笙
 夏從中來
 譬若朝露
 憂思難忘
 青青子衿
 食野之萍
 皎皎如月
 不可斷絕

越百度阡
 心念舊恩
 遠樹三匝
 水不厭深
 歌ハ四箴之諸將...
 出大軍相當るの...
 不吉の言を吐く...
 刺史劉馥字元穎あり曹操問て曰く...
 詞といふ劉馥が曰く月明星稀烏鵲南飛遠樹三匝
 無枝可依...
 遊貞と妨る...
 枉用相存
 月明星稀
 無枝可依
 周公吐哺
 契濶款熱
 烏鵲南飛
 山不厭高
 天下歸心

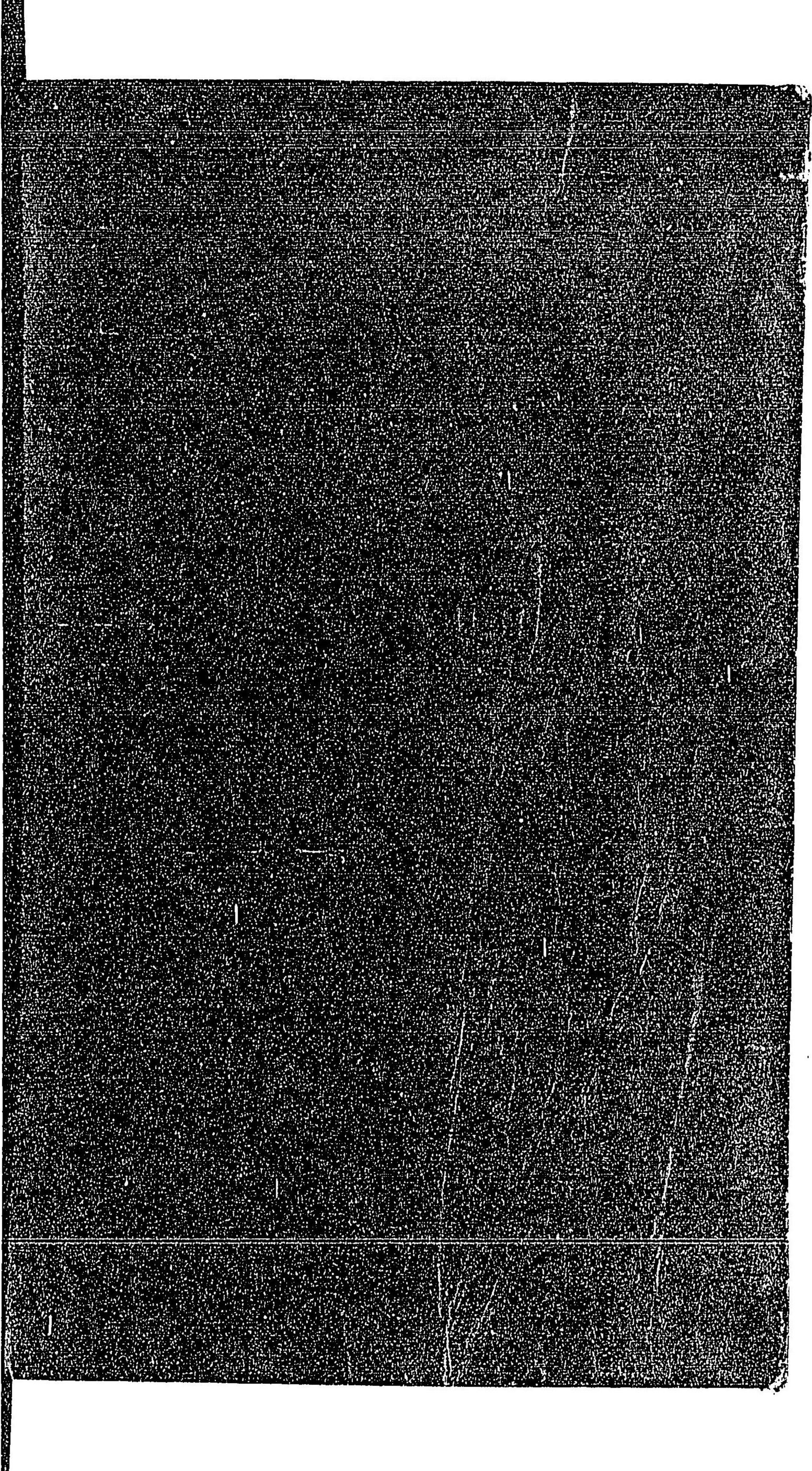
その夜の酒宴を止みたりは、この日曹操後悔して止む。劉顔が子の劉熙、父の屍を精ぐ。故郷に葬らんと欲が、ひるは曹操も涙をながし、昨夜酒を酔ひのち、父を殺す。悔まざるは、三公の禮をゆめ、のち葬るべし。劉熙は父の柩を送りて、故郷へを回る。

繪本通俗三國志四編卷之一終

122

74

28



122
74
28

繪本通俗三國志
四編
一